

百人一首を書きましよう。

秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ

わが衣手は 露にぬれつつ

【現代語訳】

秋の田の傍そばにある仮小屋の屋根を葺ふいた苦とまの目が粗いので、私の衣の袖は露つゆに濡ぬれてゆくばかりだ。

天智天皇

春すぎて 夏来にけらし 白妙の

衣ほすてふ 天の香具山

【現代語訳】

春が過ぎて夏が来たらしい。夏に純白じゆんぱくの衣を干すという天の香具山なのだから。

持統天皇

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の

ながながし夜を ひとりかも寝む

【現代語訳】

山鳥の尾の垂れ下がった尾が長々と伸びているように、秋の長々しい夜を一人で寝ることになるのだろうか。

柿本人麻呂

田子の浦に うち出でてみれば 白妙の

富士の高嶺に 雪は降りつつ

【現代語訳】

田子の浦に出てみると、まっ白な富士の高嶺たかねに今も雪は降り続けていることだ。

山部赤人